



(大阪東北部)

天満本願寺の有力な推定地である。本願寺は天正一九年に京都六条堀川（現在の西本願寺の位置）に移るが、一九九三年以来行なってきた発掘調査の結果、本願寺が天満にあった時期だけではなく、移転後にも大名屋敷と考えられる大規模な屋

大阪・天満本願寺跡

- 1 所在地 大阪市北区天満一丁目
- 2 調査期間 一九九七年（平9）七月～八月
- 3 発掘機関 (財)大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 豆谷浩之
- 5 遺跡の種類 近世寺院跡・城下町跡
- 6 遺跡の年代 安土桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪・天満の東端部、旧淀川に臨む位置に大蔵省造幣局がある。この地は、天正一三年（一五八五）に豊臣秀吉によって招致された

敷が営まれていたことが明らかになった。天満は、慶長一九年（一六二四）の大坂冬の陣の際に戦場になり、右の屋敷もこの時に焼け落ちていた。大坂の陣後まもなく徳川幕府の直轄地となり、大坂町奉行所の与力屋敷などが設けられている。

今回の発掘調査は、造幣局貨幣課工場の建替に伴うものである。調査地点は、大坂町奉行所与力の吉田家の屋敷地に含まれていたことが、文献史料から明らかになっている。調査の結果江戸時代の廃棄土坑が数基検出された。木簡はこのうちの一基から計一〇点出土した。共伴する陶磁器から、一八世紀初頭頃の遺構と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

- (1) $\begin{bmatrix} \text{V} & \text{口} & \text{口} \end{bmatrix}$ 165×18×3 033
- (2) $\begin{bmatrix} \text{口} & \text{三石} & \text{口} & \text{入} \end{bmatrix}$ 藤 $\begin{bmatrix} \text{口} & \text{口} & \text{口} \end{bmatrix}$ 140×32×4 051
[兵衛カ]
- (3) $\begin{bmatrix} \text{口} & \text{米三升五合入} & \text{九郎右衛門} \end{bmatrix}$ 126×20×4 033
小介
- (4) $\begin{bmatrix} \text{口} & \text{式} & \text{口} & \text{口} \end{bmatrix}$ 128×18×4 011

(5) $\left[\begin{array}{c} \circ \\ \square \end{array} \right] \quad (70) \times 25 \times 4 \quad 019$

(6) $\cdot \left[\begin{array}{c} \text{大} \\ \square \end{array} \right] \quad (91) \times 21 \times 3 \quad 019$

$\cdot \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right] \quad (85) \times 16 \times 4 \quad 039$

(7) $\cdot \left[\begin{array}{c} \text{上} \\ \text{今} \\ \square \end{array} \right] \text{村} \quad (108) \times 19 \times 5 \quad 039$

$\cdot \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right] \quad (105) \times 30 \times 4 \quad 081$

$\left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \square \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right] \quad 157 \times 84 \times 4 \quad 065$

(9) $\left[\begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right] \quad (10) \text{「通入」}$

(10) $\left[\begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right] \quad (1) \sim (3) (7) (8) \text{のように付札状の形態をとるものが多い。}$

(1)は竹製である。(10)は、やや幅の広い板の中央に墨書したものである。端の数

個所に釘孔が見られることから、箱などの一部と推定される。

今回出土した木簡は、墨書が不鮮明なものが多く、文字の確定で

きるものは少ない。

9 関係文献

(財)大阪市文化財協会『天満本願寺跡発掘調査報告』IV (一九九八年)

(豆谷浩之・鳥居信子)



(1)



(10)



(2)表



(3)表



(7)表